

大会主題は、「グローバル化社会の学校教育」。同校から徒歩5分程度の場所には、全長10キロの分科会では、実践事例を面瀬川があり豊かな森林のもとに児童の資質・能力と気仙沼湾をつないでいる。このコンパクトな自然環境の中で、森、川、海のつながりを学ぶのは、絶対的な位置にある。

同分科会では、「資質・能力の育成を重視する教育課程の編成・実施(ESEDを例にして)」がテーマ。ユネスコ基本条例に基づき、宮

教育の実践に、アメリカの学校と共同で取り組んできた。アメリカの小学校と交流を深めながら、地域に根差した体系的な『探究型学習プログラム』の開発と実践の推進がねらいである。

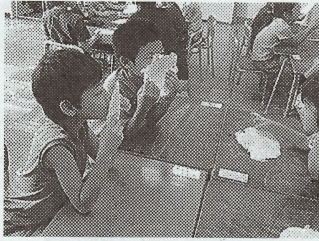
東日本震災に被災した同校では、地域のよりよい未来を考える児童の育成のため、ESEDで育てたい資質・能力を、①

「一連の知的営み」と習の成果をまとめた。また、昨年度まで同校の校長を務めた長田勝一氏は「ESEDの根底にある、よりよくともに生きる子どもの資質」をつくっていくことが大切なことだ。本校でいうとESEDの中核は環境教育であるが、各教科や道徳、学活、総合などで得たものとリンクさせることで、ESEDを学びながら、学

## 好奇心で目を輝かせる

### 地域の協力で多様な講座

東京都八王子市立秋葉台小学校



ソウのうんちは臭くない!!。東京都八王子市立秋葉台小学校(小林

幹彦校長・42名)は7月22~25日の4日間、同校で「秋葉台小サマースクール」を実施した。夏休みという機会をとらえ、地域人材や保護者を講師に多様な分野の講座を開き、地域と協働で児童の興味・関心を育てようというもの。新たな知識に触れた児童たちは、驚き

を輝かせていた。開かれたのは、キッズヨガやサッカー、親子で書道、ペットボトル水ロケット、光の不思議など全29講座。これらはすべて地域の人も保護者などの協力によるもの。

最終日は24人の参加がありにぎわった。午前中は、川添敏弘ヤマザキ学園大学動物看護学部講師とその学生らによる低学年向け「ソウのうんちのひみつ」や高学年向け「トリになって森をみつめよう」が行われた。

低学年向け講座では、動物看護師を目指している学生らが、アフリカツウとアジアソウの違いなど、自分たちで書いた絵や写真で説明。後半には、ソウの糞から抽出した植物繊維で漉いた和紙を使ったワークショップが行われた。和紙は丸形で、子どもたちはその上に、もう一枚紙を貼り思い思いのソウの絵を描いた。

事前の説明で、ソウの糞は、主にワラなどを主食としていたため、臭くないと聞いていた児童らだ

が、実際の糞で作った紙を見せると「えー!!と驚いた様子を見せ、手元に配られた和紙を嗅いで匂いを確かめていた(写真)。また、学生が実際に動物園に行き、糞を採取し手作業で余分なゴミを洗って紙を作ったと聞くと、真剣な顔になり、興味深そうに話を聞いていた。

## 人間中心の開発観

### 第5回

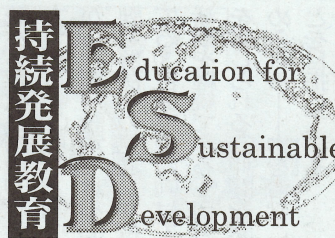
○人間性と関係性を尊重する 第2は、「個々人が他人とのさまざまな関係性の中で互いに目的の明確化と並んでもう一つ重要なことがある。それは『関わり』『つながり』である。経済も環境も社会も文化も、すべて人間を中心

「国連ESEDの10年のための」も文化も、すべて人間を中心

「国連ESEDの10年のための」も文化も、すべて人間を中心

えた概念だからである。○ユネスコの教育事業とESEDの関係

ユネスコは、60年代から途上国に対する開発援助に力を注いできた。その間一貫して唱えてきたのは、「人間こそ開発のアルファでありオメガでユネスコが中心となって教育の改善を目指す「普遍的初等



## 持続可能な地域を創る

愛知県岡崎市立常磐南小

「将来、私はこの常南に住んでいないかもしれない」と題し、学校評議員と児童が常南学区の20年後の姿を本音で語り合う姿を、体育館で公開した。

環境保護が開発か、学区を存続させるためにはどうしたらよいかを、大人も子どもも、本気で討論し合った。「常南のこのころ」が根付いた子ども

「すてきミーティング」と題し、学校評議員と児童が常南学区の20年後の姿を本音で語り合う姿を、体育館で公開した。

環境保護が開発か、学区を存続させるためにはどうしたらよいかを、大人も子どもも、本気で討論し合った。「常南のこのころ」が根付いた子ども

のJICA市ヶ谷ビルにてアートマイルセミナーを開催した。

セミナーでは、日本と海外の学校をつなぐ「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」(文科省・外務省後援事業)が参加、

達志水町立樋川小学校が、サモアの参加校を支援したJICA青年海

外協力隊の元隊員の梅田力氏による事例発表や、清水和久金沢星稜大学教授による壁画を用いた表

現力育成についてのワー

サモア

「常南でも、どこに居ても、この常南のことを気にかけていたいと思います」。6年生A子が、昨年10月のESED研究発表会で、300人を超える参観者を前にして語ったふるさと常南への正直な思い。

「すてきミーティング」と題し、学校評議員と児童が常南学区の20年後の姿を本音で語り合う姿を、体育館で公開した。

環境保護が開発か、学区を存続させるためにはどうしたらよいかを、大人も子どもも、本気で討論し合った。「常南のこのころ」が根付いた子ども

「常南でも、どこに居ても、この常南のことを気にかけていたいと思います」。6年生A子が、昨年10月のESED研究発表会で、300人を超える参観者を前にして語ったふるさと常南への正直な思い。